

授業における平常点の考え方 (申合せ)

はじめに

本学における教育の質保証を実質化するため、各授業科目の成績評価における、いわゆる「平常点」の定義と構成要素について、全学的な共有認識を形成することが必要である。教学マネジメントは、本学が教育目的を達成するために行う組織的な管理運営であり、学修者本位の教育の実現、学修成果の把握・可視化、成績評価の信頼性確保と密接に関わる。そのため、平常点についても、単なる慣習的な加点項目ではなく、授業の到達目標に照らして学修過程と学修成果を多面的に把握する評価方法として位置付ける必要がある。

1. 「平常点」の定義

本学における「平常点」とは、授業期間中に継続的に確認される学生の学修への取組状況、授業参加の状況、課題等への取組み状況について、授業の到達目標との関係において評価するものと位置付けられる。具体的には、対面授業、遠隔授業（リアルタイム型・オンデマンド型を含む）の別を問わず、授業内外で行われる学修活動の成果や過程を、あらかじめ示された評価方法・評価基準に基づいて明示しつつ評価するものである。

したがって、ここでいう平常点とは「出席していること」そのものを機械的に加点するような、いわゆる「出席点」と同義ではない。出席は学修機会を確保する前提であり、必要に応じて定期試験等の受験資格や履修継続の要件として扱うことはあり得るが、成績評価として評価（点数化）する場合には、出席の事実だけでなく、授業への関与、課題への取組、学修成果の提示など、定性的、定量的に評価可能な具体的行動や成果と結びつけて扱う必要がある。

2. 平常点の基本的な考え方

- 平常点は、授業の到達目標に対する到達度を測定するための評価項目の一部である。
- 平常点では、授業期間中の学生の学修過程と学修成果を継続的・多面的に評価する。
- 平常点は、単なる出席点ではなく、授業の到達目標に照らして、授業参加、課題への取組、小テスト、発表、実技・実習・演習での活動等を組み合わせて評価する。
- 平常点では、学期末試験や最終レポートだけでは把握しにくい、学期中の継続的な学修の積み重ね、授業活動への参加、課題への取組も評価する。
- 平常点は、授業科目の性格に応じて個別に設定されるものであり、講義、演習、実験、実習、実技、その他遠隔（リアルタイム型、オンデマンド型を含む）授業等で同一の内容に固定されるものではない。
- 平常点を成績評価に用いる場合は、評価対象、評価方法、評価割合、評価基準についてシラバス等により学生に事前に明示する。

- 平常点は、学生にとって何をどのように学び、どのような行動や成果が評価されるのかを理解するための指針となることから、学生・教員の双方が共通理解を持てるようにする必要がある。

3. 出席状況について

出席状況は、授業参加や学修活動の評価するための前提となる情報として重要である。ただし、成績評価においては、「出席したこと」だけをもって得点化したり、加点するのではなく、授業への参加、課題への取組、小テスト、発表、実習などの学修活動等と関連付けて評価することを原則とする。特に、出席を平常点の一部として扱う場合には、シラバス上で「出席状況をどのような評価観点と結び付けるのか」を明確に示す必要がある。例えば、対面授業では発言、討論、実験・演習への参加状況等を、リアルタイム型遠隔授業では発言、チャットでの応答、グループ活動への参加等を、オンデマンド型授業においては視聴後の課題、確認テスト、コメントペーパー等の提出等を通じて、学修への実質的な関与を確認することが考えられる。

4. 平常点の構成要素

構成要素	評価の観点	留意点
授業参加における取組状況	発言、質疑応答、ディスカッション、グループワーク、実習・演習への関与など	単に出席した事実だけではなく、授業の到達目標に関係する参加の質や取組の状況进行评估する。
課題・提出物	コメントペーパー（リアクションペーパー含む）等、小レポート、ワークシート、事前・事後の学修課題など	提出の有無だけでなく、課題の達成度、内容の妥当性、理解の深まり等を評価する。
小テスト・中間テスト	授業内容の理解度、知識の定着、応用力の基礎など	学期末試験を補完し、学期中の理解状況を把握する評価として位置付ける。
発表・プレゼンテーション	資料作成、説明力、論理性、質疑への対応、協働的な準備など	評価基準を明確にし、個人評価とグループ評価の関係を整理する。
実技・制作物・実験等への取組	技術・技能の習熟度合い、観察・記録、実験データ取得、制作過程、成果物の完成度など	授業形態に応じ、過程と成果の双方を評価対象とする。
授業実施に必要な取組や行動	準備、後片付け、共同作業における役割遂行、安全管理への協力など	実技・実習・演習等において、多面的な評価を行うことや、教育上必要な場合に、評価観点として具体化する。

5. シラバスへの記載方法

シラバスには、成績評価の方法と割合を明示し、平常点を用いる場合には、その内訳又は具体的な評価対象を、上記、平常点における構成要素を参照しつつ記載する。記載にあたっては、学生が評価の内容を理解できるよう、「平常点〇%」のみの記載にとどめず、補足として括弧書き等により評価項目を具体化することが望ましい。

記載例

- 成績評価は、期末試験（〇%）、レポート（〇%）、授業への参加・課題等の提出状況（〇%）を総合して行う。
- 授業への参加・課題提出状況には、発言、質疑応答、ディスカッション又はグループワークへの参加、コメントペーパー（リアクションペーパー含む）等、小テスト、事前・事後課題の達成度を含む。
- 平常点（各授業回の小レポート、コメントペーパー（リアクションペーパー含む）等、小テスト、グループディスカッションでの発言・資料作成等）〇%。
- 演習科目においては、発表内容、討議への参加、課題提出、授業準備の状況を総合して平常点として評価する。

6. 運用上の留意点

- 平常点は、授業の到達目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの関係を踏まえて設定する。
- 評価項目ごとの割合は、可能な限り明示し、合計が100%となるよう整理する。
- 評価基準は、担当教員の主観に過度に依存することがないように、ルーブリック等を用いて具体化することが望まれる。
- 複数クラス又は複数教員で担当する科目では、評価基準の共有を行い、評価の公平性を確保する。
- 平常点の根拠となる提出物、記録、採点資料等は、成績評価の説明責任を果たせるよう適切に管理する。
- 授業形態の違いに応じて評価方法を工夫しつつ、対面・遠隔のいずれにおいても、学生の実質的な学修活動を評価する。

以上のような整理により、平常点は、教育の質保証を担保する教学マネジメントの一環として、各授業レベルにおける厳格かつ公正な成績評価を支える仕組みとして位置付けられるものと考えられる。